

# 『新編八戸市史 近世資料編Ⅲ』

山下須美礼

『新編八戸市史』近世資料編は、「Ⅰ政治」、「Ⅱ経済・産業」、「Ⅲ文化・社会」の三つのテーマに基づく三巻で構成されている。そのうち、近世資料編Ⅰ（二〇〇七年刊）は、八戸藩の領内支配や幕藩関係など、藩政に関する史料が、近世資料編Ⅱ（二〇〇八年刊）には、八戸藩領における交易や産業の実態を記した史料が収録されている。それに続く本書は、八戸藩領における文化や社会の諸相に関する事柄を扱う巻となる。本書の構成は以下のとおりである。

## 第一章 生活と教育

### 第一節 生活

### 第二節 教育

#### トピックス① 辛酸をなめた商人の遺言

## 第二章 人々を襲った災害

### 第一節 自然災害

### 第二節 火災

### 第三節 飢饉・疫病

#### トピックス② 教材としての古記録

## 第三章 文芸

### 第一節 俳諧の隆盛

## 第二節 漢詩

### 第三節 書物仲間

### 第四節 武家の蔵書と商人の蔵書

#### トピックス③ 『俳諧多根惟智山』の新春行事

## 第四章 自然科学

### 第一節 和算と暦学

### 第二節 馬医

#### トピックス④ 真法恵賢と『真法弟算記』

## 第五章 武芸

### 第一節 軍学・兵法

### 第二節 馬術の道統伝授

### 第三節 騎馬打毬

#### トピックス⑤ 八戸藩主の馬術修行く引き継がれた通信の伝書

## 第六章 宗教

### 第一節 寺院

### 第二節 神社

### 第三節 修験

#### トピックス⑥ 富闡興行による寺社の建立

## 第七章 安藤昌益

### 第一節 安藤昌益・周伯史料

### 第二節 安藤昌益をめぐる人々

#### トピックス⑦ 安藤昌益をめぐる八戸の人々

## 補遺

一、市川新田

二、分限帳

付図解説文

【付図】「風流新板東山道八戸から江戸まで道中双六」

この巻のテーマである「文化・社会」は、人間が生きて行かう活動の全てとも捉えられよう。その中で本書は、知的探求、身体的鍛錬という形で表れる人間活動と、その土台となる暮らしのあり様や自然との接点に着目した章構成となっている。

補遺は、近世資料編三巻全体に対する補足である。補遺一の「市川新田」で取り上げられる市川村は、現八戸市域でありながら、八戸藩成立以降も盛岡藩領であった地域の一部である。そのため、八戸藩を基軸として、現八戸市域の近世を振り返る際には、扱われにくい史料と地域であった。それが今回ここに補遺として収録されたのは、非常に意義深い。また、補遺二の「分限帳」は、八戸藩家臣の書き上げであるが、近世資料編全体に渡って、読解の参考にできる史料といえよう。

各章の冒頭には概説が記され、史料同士の関連性や史料の性格、収録の意義などが示されている。また、各史料の冒頭にも解説が付されている。章末のトピックスでは、その章に関連した史料の紹介に加え、その史料からどのような歴史的事実や時代背景が読み取れるのかといったことが、平易な文章で例示され、章本編を補完している。また、CD-R が付録され、史料の検索に役立つ。

次に、各章の内容や、収録された史料について簡単に述べる。

第一章「生活と教育」の第一節「生活」では、武家の婚姻と年中行事に関する史料が収録されている。婚礼については、上級家臣遠山家の娘の嫁入りにおける婚礼道具一式の書き上げと婚礼時の収支内容についてが、また年中行事については、家老職を務めた中里家における代々の継承のための記録と、実際の行事や饗応・贈答の様子が読み取れる当主の日記が取り上げられている。これらの記録の中には、出入りの町人や、知行地の百姓らとのやりとりも散見され、武家以外の人々の暮らしの営みも垣間見ることが出来る。第二節の「教育」は、藩による藩士教育に主眼を置き、藩学校の前身ともいえる「稽古所」と、それを発展的に再編した藩学校に関する史料が掲載されている。

第二章「人々を襲った災害」の第一節は「自然災害」である。地震・気象災害・凶作の発生について、八戸藩領に関わる記事を様々な史料・文献から抽出している。第二節は「火災」で、一〇戸以上焼失の火災、五五件についての記録が網羅されている。第三節「飢饉・疫病」では、天明四年（一七八四）の飢饉に関連して死亡した、藩士とその家族についての詳細な記述が取り上げられている。

第三章「文芸」の第一節は「俳諧の隆盛」であるが、八戸の俳諧は、七代藩主信房自らが俳諧に親しみ、藩士や商人、僧侶らにもその裾野を広げていったとされる。俳人を句と絵姿で紹介した『俳諧風雅帳』や、章末トピックスで取り上げられた『俳諧多根惟智山 春之部』によって、八戸藩領におけるその隆盛ぶりが見て取れる。第二節「漢詩」では、將軍綱吉の側用人に抜擢され、漢学詩文に秀でた二代藩主直政の詩文の一部が紹介されている。第三節「書物仲間」は、書籍の共同利用と勉強会

を兼ねた藩士を中心とする組織で、現在の八戸市立図書館の母体となったといわれている。収録された書類引継ぎに際しての史料は、その創設時期などについて、新たな見解の可能性を有する。第四節「武家の蔵書と商人の蔵書」では、書物仲間が所蔵する共同の書籍とは別に、個人で所蔵した書籍とその整理の様子が分かる史料として、武家・商家それぞれの目録が掲げられている。

第四章「自然科学」の第一節は「和算と暦学」である。和算については、八戸藩の和算の開祖と言われた真法恵賢が全国に掲げた算額を弟子が写した「真法弟算記」と、恵賢の後継者を名乗った神山由助の著作で、藩学校のテキストとして使われた「楷梯点竄」が紹介されている。算額は風雨にさらされ、現存するものが少ないことから、その内容を伝えるものとして、「真法弟算記」は貴重である。「暦学」については、八戸藩儒医平田周庵が奉納した「万年暦」と呼ばれる、百年間の暦日を推算した珍しい暦額が収録されている。第二節の「馬医」は、馬産地ならではの内容であり、藩の馬術師範が藩主に提出した馬の医学書とともに、民間における馬の飼育法や民間療法についての史料が収録されている。

第五章は「武芸」である。第一節は「軍学・兵法」とし、甲州流が八戸南部家の御家流に定められた経緯、その修業のために必要な書籍、また、藩内の諸芸各流派について、その由来が記された史料が収録されている。第二節では「馬術の道統伝授」として、八戸藩の御家流である徒鞍流馬術における、藩主を介在させた道統の継承について、その伝授の儀式や道統者の役割に関する史料が収録されている。第三節は「騎馬打毬」である。八戸の加賀美流騎馬打毬は、現在でも行われている数少な

い騎馬打毬の一つであり、なおかつ古い形を最もよく伝えていると言われている。

第六章「宗教」の第一節「寺院」では、八戸南部家の菩提寺・祈祷寺に関する史料や、寺院としての重要な役割の一つであった、寺請状発行の記録が掲載されている。第二節「神社」は、神社祭祀の際の藩主の代参派遣について、その順序の記載や、気候・生業に関わる祈祷についての記録が中心である。第三節「修験」では、本山である聖護院の若王子乗々院とのやりとりを中心に追うことにより、乗々院を頂点とする支配体制の中、領内の山伏がその体制の中に位置づけられていった様子を知ることができる。

第七章は「安藤昌益」である。第一節「安藤昌益・周伯史料」では、昌益が八戸に在住していた事実を、八戸藩に関わる史料から示したほか、息子とされる周伯の動向についての史料も収めている。また、今後の昌益研究の進展を期して「詩文聞書記」が、全文翻刻と写真で紹介されている。さらに第二節は「安藤昌益をめぐる人々」として、昌益の弟子や付き合ひのあった人々の動向に光を当て、彼らの行動から昌益の理解をさらに深めようとの試みがなされている。ここでは藩士の岡本高茂と福田六郎の二人に焦点を絞り、「目付所日記」から、関連の記事が抜粋されている。

補遺一は「市川新田」である。盛岡藩主南部利視の命により始まった市川村の新田・漁場開発は、円子嘉右衛門という「地方巧者」をその責任者に得ることにより、着実な進展を見せ、飢饉への備えも図られた。ここでは、円子嘉右衛門の執務記録と、その後の状況を記した史料によ

り、市川新田と御手漁場について、その成立から幕末までの様子を把握することができる。また、沿岸部の漁業についても、多くの情報を得られる。補遺二の「分限帳」では天保年間に作成された二点が紹介されている。苦米地家文書「御家中分限帳」では、家臣団全体を見渡すことができ、淵沢家文書「八戸藩御家中分限帳」は、地方知行地を与えられた藩士について、その知行場所が記されていることが特徴である。

「付図」として、「風流新板東山道八戸より江戸まで道中雙六」と「五戸市川新田所図」が収録されている。一点目は八戸から江戸までの道中を雙六に仕立てたもので、場所ごとに句が詠み込まれ、第三章「文芸」の関わりからも興味深い史料である。また二点目は、補遺一の「市川新田」に関する三枚組の絵図の一枚で、ほかの二枚は口絵に載せられている。

以上、本書の内容と史料について概観した。前述の通り、本書のテーマが「文化と社会」という広範な事象を指すものであることは、誤解を恐れずにいえば、第一巻、第二巻の政治・経済・産業以外の諸相すべてがその対象に含まれるとも捉えられ、編集にたずさわった方々が、そこから何を取り上げ、どのように章立てするかというところで、試行錯誤されたであろうことは想像に難くない。その中で、近世の八戸地域を、最も端的に捉え得る七つの章が設けられ、それぞれ非常に内容豊かで、そこから様々な世界が展開する可能性を持った史料が集められた本書を手にとることができたのは、八戸地域の歴史に関心を持つ者の一人として、非常に幸いである。

一方で、「文化・社会」が、もしくは章として取り上げられた各分野そ

れぞれが、政治や経済と全く切り離されて存在するものではない以上、収録史料の境界線をどこに引くかということも、難しい判断ではなかったかと推察する。例えば、第二章の「災害」においては、史料から丁寧に掘り起こされた記述や数値によって、その発生周期や被害の規模などについて我々は知ることができ、今後の防災にも役立てられるということを目の当たりにした。しかし、人間社会において、「災害」は発生した事実のみで成立するわけではなく、それを防ぐためにどのような知恵を働かせたのか、そして、蒙った被害からどのように日常を取り戻していったのか、という場面も含まれよう。被害からの復旧は、ことのほか、政治や経済の動きと切り離せない問題であるから、この巻には馴染みにくいとの判断があったかもしれないが、それらについて多少でも触れていただければ、なお今日的な役割が強まったのではないかと考える。

本書を通じて、「ハレの日」、もしくは特筆すべき出来事の記録から、日常あるいは通常の様子が透かし見え、また、個人の記録から社会の有り様、反対に集団や組織の記録から個人の活動が観察できることの面白さを実感した。様々な切り口を持った本書が、新しい歴史研究の成果につながることはもちろん、この地域を振り返り、歴史から示唆を受けるとき窓口として、多くの方々に読まれることを期待したい。

(B5判、六〇五頁、八戸市、二〇一一年三月刊、価格五六〇〇円)

(税込)

(やました・すみれ 筑波大学人文社会系)